

太極拳推手の「真」と「偽」

馬 長勳 (口述), 王 子鵬 (整理), 石原泰彦 (日本語訳)

武術の表演は実戦ではない。本来、「真（本物）」か「偽（偽物）」か、とか言うものではない。しかし、太極拳推手の表演ということになると、「真」と「偽」は一つの問題であるばかりでなく、非常に致命的な問題となる。

“三節棍で槍を攻める”, “徒手で刀を奪う”などの武術の表演では、二人が打ち合うのは当然「真」ではないけれども、観る人はみな、その動きが精妙、激烈で真に迫っているものほど良いと見分けるのだが、二人が必死になって、本当に相手が死に、自分が生きること求めているわけではない。ただし、太極拳推手になるとこのような表演では、観ている人が耐えられないやり方になってしまう。

“傍観者は分からない”

私が公園で生徒と推手をやっていると、いつも人から“先生、あなたがやっていることは、本物ですか、嘘（偽）ですか？”と聞かれる。私はいつも、“これは嘘ですよ、私たちはただ遊んでいるだけです”と応える。このように応える以外に、太極推手で相手に触った経験のない人に、どのように説明できるだろうか。実際のところ、太極推手にこのように疑いを持つことは、太極推手が表演形式で始まったことから来ているもので、もともと最初から付きまわっているものである。人のことより、私自身が初めて推手を見た時に、これは本物なのか、と疑ったものです。何の力も使わず、人を2~3丈（2丈で6~7メートル、3丈で10メートル余り）飛ばすことができるものか、と思ったものである。「劉 晩蒼」老師に会って実際に推手を学ぶようになってから、また、劉老師の師匠の「王子英」老師の推手を見た時に初めて、推手が「まちががなく本物だ（真是真的）」と分かった。推手というものは、本当に自分で実際に体得して初めて分かるもので、そばでただ観ている人には分からないものである。

私の印象に残っているのは、北京の豊台公園で、香港の復帰を祝う催しがあった時（1997年）のことである。私の二人の生徒が表演を行い、自分は観衆席に座っていた。私のそばの観衆は何と言っていたか。「この2人はもっともらしく、いかにも上手くやっているように見えるね」。何も知らないで、疑いも持たないことは、不思議なことではない。

ただし、意識的に、目的を持ってこの種目を否定しようとする、と、深刻な結果を招くことになる。特に、

ある専門家がこのような観点を口にする、と、直接、政治指導者の政策に影響を与えることになる。

1979年に南寧市で全国武術観摩大会が開催された時、私は「吉 良辰」と推手の表演を行った。その時が、あのような模範的な推手表演を行った最後の機会であった。その後、指導者が発言し、「これは先生が生徒をだまし、先生と生徒が一緒になって観衆をだますものだ」と述べた。その言葉により、推手表演はそれ以後停止されることになった。

1981年に瀋陽市で、推手競技の競技規則を検討する会議が持たれ、私も参加した。1982年以後は、競技性の推手試合が試験的に開始されるようになり、完全に推手表演に取って代わることになった。当時、推手競技と散打競技が同時に始まったが、実際のところ、散打競技はますます内容が備わってきたものの、推手競技はますます没落して行った。第一に、観衆がいなくなり、第二に、太極拳の内容的な価値が失われた。言わば、表面のことも中身のことも失われたことになる。

推手表演は、1960年初頭は隆盛で、一世を風靡するものであった。当時は、北京では気候が暖かくなればいつでも、東単公園、西単公園、北海公園などの露天体育場で、毎年、何度でも、太極拳の演武会が持たれた。どの会場でも、観衆が押しかけて身動きがつかないほどであった。観衆が群がって、縁台を持ちだしてその上で立って見ていた。これらは私が実際に見た状況であった。当時、皆がこの武術の演武会を愛好していて、入場料はすべて1毛銭であった。

老武術家としては、大概60歳代、70歳代の有名な人たちで、例えば、「呉 斌楼」は「刀と鞭」を、「張 文平」は「鉄門坎」を演武した。

演武が進んで内科拳の部門になると、太極、八卦、形意等々があり、また、太極拳専門の部門が行われた。当時はっきりしていたものでは、最年長は90数歳の「李 尧臣」で、その他の老先輩は、「陳 子江」、「駱 興武（形意）」、「崔 毅士」、「王 子英」、「楊 禹廷」、「徐致一」、「呉 凶南」等であった。年若い人では、「尚 雲庸」、「王 達三」、「李 秉慈」、「劉 高明」、「宋 志平」、「孫 楓秋」などがいた。当時の北京では、主に楊式太極拳と呉式太極拳が練習されていた。表演の開始の時には、普通、「李 秉慈」と「劉 高明」が太極拳、劍、刀などで始め、続いて「孫 楓秋」、「宋 志平」などの中年連が「大掙」や推手を行った。後半はみな老先生達で、やはり套路を行い、最後のまとめに推手を行って観衆の一番の歓

迎を受けた。私のはっきり覚えているのは、始めに「楊禹廷」、「崔毅士」、「徐致一」、「呉凶南」で、その後、「王子英」、「郝桂俊」などの老先輩がみな出演した。観衆が多い時は、立って観る場所もすべてなくなった。ただし、推手が競技になってから、観衆がますます減って、観衆より出場する選手のほうが多い状態となり、完全に観衆が集まって観る基礎がなくなってしまった。

さらに、推手競技は太極拳の内在的なもの（内涵＝内包するもの）を完全に失ってしまった。現在の推手競技では、太極拳が「静で動を制する」、「力は相手から借りる」、「己を捨てて相手に従う」、「4両で千斤を抜く」などの内在的なものを体現することができなくなり、基本的な技術の内容を失ってしまっている。人はよく、現在の推手は「摔跤＝中国相撲」に似ているが、その実「摔跤」に及ばないと言う。「摔跤」には技術があるが、推手はただ牛がぶつかり合う＝「頂牛」だけのものになっている。ある人は、砂地で石を詰め込んだ一輪車を推すような訓練方法しかないとも言っている（もちろん皮肉）。このようにして長年たつと、内在的なものが失われ、観衆も失われてしまった。

推手競技はひとつの実験段階であるので、過大な要求をするべきではないとも言えるが、しかしながら、この推手競技の方式は、すでに死の淵に入っていると言える。

“推手表演に一筋の可能性を”

しばらく前に、私はインターネットの《世界太極拳ネット》で、一篇の文章を見た。そのなかで、文の作者と弟子達は推手の試合でそれぞれに良い成績を挙げたことを述べているが、文章中で彼らは、自惚れること無く、それどころか、試合中に力がぶつかり合う「頂牛」の状態があったことを見直していた。これは喜ばしい現象である。現在の国の関係部門が推手競技で試行してきた長年の状況に対して、総括と見直しをすべきである。

このような機会をとらえて、太極推手はその技術の本質に立ち帰ることができるよう、希望するものである。

太極推手は、その本質から言って太極拳の独特の訓練方法である。太極拳を練習するのに、他の武術のように「木人桩」で練習することも、「砂袋」を打つことも必要なく、せいぜい人がいない時に、「大杆子＝長い棒」を振り回すことぐらいである。相手と一緒に練習する（操練）するなかで、具体的に表現されるものが太極推手である。それは本来、実戦ではないけれども、この種の練習方法を通して、お互いの「靈敏度（敏感に反応する能力）」と「鬆静力（ゆるめて安靜な

状態で力を保つ）を少しずつ養って行くことにある。このようなものが次第に人体の本能的な反応能力を養って、その後、実戦中に大脳の反応を通じなくても直接反応できるようになるわけである。このような功夫をひとまず「太極勁」と言うわけである。このような太極勁は、必ず「王宗岳」の『太極拳論』の要求に基いて練習することで、はじめて可能なことになる。それは筋肉の力でもなく、また、力の上に功夫を加えることによってできるものでもない。

私がかつて「王茂齋」（王子英老師の父、呉式1代目伝人）先生の家に行った時、それは中国開放前（1949年以前）のことであったが、老先生は皆が推手の練習をするために、家のなかに輸入品の磁器煉瓦を敷いて、毎日それを灯油でピカピカに磨き上げて、非常に滑り易くしていた。普通の人々が注意しないで立つと、滑って非常に不安定なものになっていた。推手で力を比べ合おうとし、力を使おうとしても出てこないものであった。ある時、私が王家で太極拳を学び、その敷物の上で練習していたときのことであった。王家では、「王子英」老師が生徒の練習するのを見ていたが、ある生徒がこっそり無理な勁を使っているのを見て、王先生はすぐに彼に対して、「あなたはここに来る必要がない。あなたは太極拳を練習する必要がない」、「こういう力と気の使い方は太極拳ではない、したがって練習する必要が無い」というように厳しいものであった。

しかしながら、非常に大勢の人が王家の2代にわたる先生から多くのものを学んだものである。呉式太極拳第3代伝人の「劉光斗」、「楊禹廷」、「張繼之」、「李文傑」、「曹幼甫」等はみな、「王茂齋」先輩から学んだものであった。呉式太極拳第4代伝人の「劉晚蒼」、「李経伍」、「温明三」、「孫風秋」等、また、呉式太極拳第5代伝人の「馬長勳」、「戴玉三」、「趙德奉」、「李樹峻」などの2代（第4代、第5代）は、「王子英」先生から直接指導を受けることができた。

「劉晚蒼」老師が私に教えられる時に、一番よく言われた言葉は「勁（力）を使うな」ということであった。劉老師の功夫は素晴らしく、手を一振りすると相手は2～3丈飛ばされたものである。さらに、「王子英」老師は、手を一振りするのを見ることもできなかった（手を使ったのが見えない）。王家が教えたのは、「太極推手は、手を用いない」ということであった。このような高手は、「意識」を使うと、力（勁）と気が自然に出てくるものであったと思う。

今、多くの人々がみな「実戦」と「技撃」を強調しているが、それらを強調すればするほど、何もなくなってしまふ。勝っても負けても、「太極拳で勝ったのか?」「あなたは4両の力で千斤の力に勝ったのか?」、「あ

なたはゆるめた力（鬆）で相手を押し出したのか、それとも、空（から）の力で押し出したのか？」。私が見る限り、みな力を込めて相手を押し出している。これは太極拳では無い、太極拳とは関係のないものである。

従って、国がこの種目を普及しようとする観点から言えば、体の上下にわたる太極拳の内在的な功夫を訓練する方法を発掘すべきである。大勢の人々が推手が好きで、この種目を愛好しているのであるから、その「拳理（太極拳理論）」を真剣に学習し、理論に沿って練習することで技術の偏りをなくすことが必要である。

現在、天壇公園、地壇公園、元の大都公園などで毎週大勢の愛好者が集まって、一緒に推手を研究し、お互いに演じあっている。ただし、詳細に看ると、力を使う推手が少なくない。推手で力を使うことは、やはり、拳理をまだ理解していないことの表れで、必ず拳理の学習に注力しなければならない。

表演は一つには、太極推手の技芸を示すことができるものであるが、その表演を競技にすることができるものであろうか？ あなたが、誰の表演を本当のもの<真>とするか、そうでない<偽>とするかにかかわらず、誰が行うのが「太極拳」らしいか、誰の表演が《太極拳論》に符合しているか、誰が太極拳の『弱者の道

で用いるのか、その反対で動くのか（弱者道之用、反者道之動）』（老子）の内容を備えているか、誰が優れているか、を見極めることが必要となる。本物<真>であれ、そうでない<偽>であれ、本当の推手というものは、このように見極める必要がある。少なくとも、形式上、外観上はこのようになる。

“<偽>を本当<真>のように行う時、<真>もまた<偽>となる（偽作真時真亦偽）”道家※ではまた、“<偽>を借りて<真>を修める（借偽修真）”と言う。時間が経てば、偽も真になるということである。反対に、もしも始めのところで根本的に誤っていると、浪費した気力が大きければ大きいほど、その内容は太極拳とは大きく離れたものになってしまう。「差之一毫謬以千里」（手元で僅かに足りなくても、先に行けば大きな開きとなる）。

この意味から、太極推手の“表演”に一筋の可能性を見出し、さらにそのことで太極拳套路にも可能性を見出すことで、後代の人々に本当の（真の）太極拳にたいして正確な道筋を与えてゆけるようにしたいものである。

※道家：中国古代（紀元前5～6世紀）の思想家。

老子『道德経』などを表した。老子の思想は太極拳の思想基盤となっている。